

# 豪奢な反逆

## ～谷崎文学の現代における可能性～

関西学院大学社会学部3年 岡田 悟

わが吐く息に炎あり           おのが心にまどひあり  
人をつめたくあさましく      世をうらめしくあぢきなく  
思ひみだれてこのごろの      すねたる身とはなりにけり。

われを狂ふと人はいへ        もゆる思は胸にわき  
ひとり悶ゆるをりをりは      涙をそゝぎ血をそゝぎ  
のろひの筆をはしらせて      はげしきうたのなからめや。

谷崎 潤一郎 「述懐」<sup>(1)</sup>(抄)

### 「純愛」ブーム

いわゆる「純愛」がブームであるらしい。片山恭一氏の小説『世界の中心で、愛を叫ぶ』<sup>(2)</sup>が300万部を超える驚異的なベストセラーを記録したばかりか、映画化されて(行定勲監督 東宝)、公開後2日間の観客動員数が42万7000人、その後もロングラン公開が続くという大ヒットを見せて<sup>(3)</sup>ブームとなった。映画の舞台となった香川県庵治町の海岸には全国から若い男女が訪れて、文字通り「愛を叫ぶ」のだそうである。今春からはテレビドラマ化もされた(TBS系)。一体どんなに素晴らしい話なのかと思って原作の小説を読んでみれば、とある地方に住む高校2年生のサク(朔太郎)が、中学からの同級生であるアキ(亜紀)といわゆる「純愛」を育て楽しく幸せな日々を過ごす、アキが白血病(!)を発病し、サクが2人でオーストラリアへ行こうとアキを病院の無菌室から連れ出すも、空港で倒れて帰らぬ人になり悲嘆に暮れるという、甚だ陳腐というか、類例があり過ぎて思い当たらないほどにごくありふれた悲恋物語なのである。こうした<sup>えせ</sup>似非青春小説に何百万人もの人々が涙する世の中とは、一体何なのだろうか。真夏の無人島での一夜が果たしてキスだけで済んだのかという<sup>げす</sup>下司の勘繰りも、「純愛」の前には不問に付されてしまうのだろうか？

「純愛」と言えば、韓国のテレビドラマ「冬のソナタ」(NHK総合テレビ)<sup>(4)</sup>も無視出来まい。主演俳優の「ヨン様」ことペ・ヨンジュン氏が4月に来日した際に、羽田空港に約5000人ものファンが詰め掛けて大騒動となるなど、空前の「冬ソナ」ブームが巷を沸かせている(さすがにあのポピュリズム宰相が「私もジュン様と呼ばれたい」と真顔で言い放ったのには、もはや憤りや軽蔑の念を超えたある種の感慨すら催したが)。この「冬のソナタ」もまた、高校生のユジンが、想いを寄せる同級生ジュサンの事故死という悲劇

を迎えるも、10年後に彼と瓜二つの男性ミンヒョンに遭遇し、幼なじみの男性サンヒョクを巻き込んだ三角関係に陥ってすったもんだを繰り広げるといふ単純な展開を、出生の秘密や記憶喪失といった「禁じ手」とも言えるほど凡庸な設定に基づいて描き出す、往年の少女漫画の「韓流」仕立てに過ぎないのである。

高校時代の「純愛」と恋人の「死」が『世界の中心で、愛を叫ぶ』と「冬のソナタ」の共通点であるが、高校時代に実際に恋人の死に遭遇している人など稀であろうから、誰もがこういった「純愛」に心底共感しているとは私には思えない（恋人の死の後を主に描いた「冬のソナタ」に熱中するのはまだ解らなくもないが）。むしろ、実際にはありそうもない「純愛」をフィクションとして消費し、楽しんでいるだけなのではないか。

ところが、事はそう単純でもなさそうである。精神科医である大平健の『純愛時代』（岩波新書）によると、「現代の恋愛では、純愛に憧れる自分は、真実の愛を諦めたまま毎日の現実に埋没している〔自分〕にいつも不満をもって」おり、「平凡ではない“とびっきりの愛”に突き進んだ挙句、発病に至った」患者が彼の下を訪れるのだそうである<sup>(5)</sup>。「純愛」を当然そうあるべき理想として信奉するあまりに精神疾患に陥る人さえいるのだから、むしろ「純愛」とは正反対の、背徳や頹廢や放縱の極地を理想に掲げるのもひとつの方法ではあるまいか。

「冬のソナタ」はともかく、『世界の中心で、愛を叫ぶ』を1冊読んだだけで「ああこれが文学なんだ」と得心してしまう読者が数多<sup>あまた</sup>いるであろうことは大いに口惜しい限りである。今こそ私たちは、谷崎潤一郎という日本文学史上稀に見る天才を思い起こすべきではないだろうか。

## 谷崎の文壇デビュー

谷崎潤一郎は1886年（明治19年）に東京日本橋で生まれた。10代の半ばに父が事業に失敗し、貧窮の中、住み込みで家庭教師をするなどしながら一中、一高、東京帝大 国文科に進み、1910年（明治43年）に小山内薫や和辻哲郎らと第2次『新思潮』を創刊、翌年には永井荷風に激賞されて華々しい文壇デビューを飾った。日露戦争の終結から5年が経過し、日本が近代国家としての礎<sup>いしづえ</sup>を強固にしつつあった当時、文壇を席卷していたのは、被差別部落出身の青年教師が父の戒めを破って自らの出身を明かすという島崎藤村の『破戒』<sup>(6)</sup>や、地位も家庭もある中年の作家が若い女弟子に想いを寄せるという、田山花袋の自身の経験を基にした『蒲団』<sup>(7)</sup>など、いわゆる自然主義文学の作品群であった。谷崎にもっとも強い影響を受けたと自他共に認める作家の河野多恵子によると、自然主義文学とは、「一言でいえば、人生いかに生きるべきかを問う文学のこと」であり、「人間性と人生にきわめて浅いところで妙に生真面目に結びついたもの」であるという（『谷崎文学の愉しみ』<sup>(8)</sup>）。

「『自然主義にあらざれば作家にあらず』の感があつた」当時の文壇の風潮に「反感を持ち、それに叛旗<sup>はんき</sup>を翻<sup>ひるがえ</sup>さうと云ふ野心」（『青春物語』<sup>(9)</sup>）を抱いていた谷崎の出世作「刺青<sup>しせい</sup>」は、刺青師の清吉が、「長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のやうに物凄く整つ<sup>ほりものし</sup>」た顔をした「年頃は漸<sup>やうや</sup>う十六か七」の娘を眠らせて、その背中一面に巨大な

女郎蜘蛛の刺青を彫り付け、娘が自身の魔性に目覚める<sup>(10)</sup>という短編である。ここでは、「人生いかに生きるべきか」といった生真面目な問いは一切顧みられることなく、男性はただただ女性の美を崇拜し、その犠牲となって身を滅ぼすだけであるという谷崎の世界観が鮮やかに表明されている。こういった世界観は、1924年(大正13年)に発表された代表作『痴人の愛』における、平凡なサラリーマンの譲治が、カフェで給仕をしていた少女ナオミを「西洋人にも劣らないやうな」<sup>(11)</sup>理想の近代女性に育て上げようと奮闘した挙句、彼女の魅力の奴隷となっていく様や、1961年(昭和36年)に発表された『<sup>ふうてん</sup>瘋癲老人日記』における、息子の嫁に想いを寄せる老人が、死後もなお彼女の足に踏まれないと、墓石をその足に似せて造るという顛末<sup>(12)</sup>に至るまで、終生変わることがなかった。

### 谷崎が描いた「純愛」

もっとも、谷崎は「純愛」に何ら興味を示さなかったわけではない。1933年(昭和8年)に発表された『<sup>しゅんきんしやう</sup>春琴抄』では、大阪道修町の薬種商の娘で、美貌で盲目の三味線師匠春琴と、丁稚から彼女の世話役となった佐助との「純愛」が描かれているが、それはあくまでも、春琴が佐助をいじめたり罵ったりしながら身の回りの世話をさせ、佐助も喜んでそれに従うというマゾヒズムの典型であり、生まれた子どもが春琴の意向で「余所へ貰はれて」<sup>(13)</sup>いくばかりか、美衣美食を<sup>ほしいまま</sup>「怒」にし、鶯や雲雀を何羽も飼育するなど贅沢の限りを尽くした挙句、何者かによって顔に大火傷を負わされた春琴の焼けただれた顔を見るまいと、佐助も自ら目を突いて盲目になり、死ぬまで春琴に仕えるという、これこそありそうもない話なのである。佐助が「誰も眼が潰れることは不仕合はせだと思ふであらうが自分は盲目になつてからさう云ふ感情を味はつたことがない寧ろ反対に此の世が極楽浄土になつたやうに思はれお師匠様と唯二人で生きながら蓮の<sup>うてな</sup>台の上に住んであるやうな心地がした」<sup>(14)</sup>と述べているように、美の陶醉に殉じることで自らの運命を全うするという谷崎の思想が、句読点を極端に省いた流麗かつ簡素な文体を通じて遺憾なく発揮されている。

恋人の「死」という悲哀と、素朴な愛情の結晶化という『世界の中心で、愛を叫ぶ』の結末が、洋の東西や時代を問わずごまんと語り尽くされて来た「純愛」物語の「焼増し」に過ぎないのに対し、『春琴抄』において描き出された、崇拜の対象への狂信的とも言える肉体的・精神的苦役が、対象との一体化による快楽へと転化され、佐助自ら盲目となって春琴と同じ視覚世界への没入を図り、観念としての美貌の記憶と感覚世界の合一をもってその頂点を迎える過程は、「純愛」なるものの極端にして過剰なひとつの到達点を示しており、前者のようなブームと化した「純愛」と比較すれば、その独自性と新鮮さは今なお際立っていると見えよう。

### 谷崎の政治的無関心という政治性

ところで、かつて江藤淳は、田中康夫のデビュー作『なんとなく、クリスタル』を評し

て、「なんとなく」と「クリスタル」の間に「、」を入れたことが「作者の批評精神のあらわれ」<sup>(15)</sup>であると述べたが、では、『世界の中心で、愛を叫ぶ』の「世界の中心で」と「愛を叫ぶ」の間に入れられた「、」は、一体何を表しているのだろうか？本書を読んだ限りでは、闘病の末に亡くなったアキへの「愛を叫ぶ」主人公サクのいる場所こそが「世界の中心」であると強調することで、それ以外の全ての現実が「世界の周縁」でしかなく、一切視界には入らないという悲哀に満ちた心境、著者の言葉を借りれば「喪失感」を表しているものと思われる。そして、恋人の「死」を実際に経験したわけではない多くの若者がこういった小説世界に耽溺するという現象は、現実逃避と政治的社会的無関心が渾然一体となった広漠として無味乾燥な彼らの世界観が、上記の「喪失感」に重ね合わせられているということなのではないか。

さて、谷崎は自身の作品に特定の政治的意図を込めることはなかったが、にも拘らず、いくつかの作品は当局から発禁処分を受けている。長編の『細雪』<sup>(16)</sup>がそのもっともたるものであろう。大阪船場で生まれ育ち、<sup>あしや</sup>蘆屋で暮らす商家の四姉妹のうちの、慎ましく古風な三女雪子の相次ぐ縁談と、自由奔放な四女妙子の恋愛を中心に、四季の伝統行事や日常の悲喜こもごもをこれでもかというほど綿密に描いた『細雪』は、1943年（昭和18年）に『中央公論』に連載を始めるも、陸軍省報道部の「時局にそはぬ」との意向によって掲載を禁止され、翌年上巻を自費出版するが、これもまた印刷頒布<sup>はんぷ</sup>を禁止されて、戦後ようやく全巻が陽の目を見たのであった。のちに谷崎は「文筆家の自由な創作活動が或る権威によつて強制的に封ぜられ、これに対して一言半句の抗議が出来ないばかりか、これを是認はしないまでも、深くあやしきもしないと云ふ一般の風潮が強く私を圧迫した」（『細雪』回顧）<sup>(17)</sup>と述べている。

当局の弾圧に抗してまで自らが思うものを書き、世に問おうとした姿勢もさることながら、そもそも太平洋戦争という未曾有の状況の中で、それとは何の関わりもない、優雅にして緩慢な、いわば絵巻物のような小説を構想したこと自体が既に谷崎の特異性を象徴している。三島由紀夫の評を借りれば、谷崎は「大きな政治的状況を、エロティックな、苛酷な、望ましい寓話に変へてしまふ」のであり、「俗世間をも、政治をも、いやこの世界全体をも、刺青を施した女の背中以上のものとは見なかつた」<sup>(18)</sup>のであって、谷崎が戦時下においてさえこの思想を貫いたことが、意図せずとも、結果として逆説的に政治的態度表明たりえたのである。そしてこれは、「喪失感」に打ちひしがれながら「世界の中心」に独人立ち尽くし、自分以外の一切に無関心を決め込む態度をもって、読者にその場しのぎのカタルシスを与えるだけのあの「商品」とは、作品世界の充実度と時代の緊張感において次元を異にしている。

### 谷崎文学の新しい「新しさ」

再び三島由紀夫の評を借りれば、谷崎の、特に戦前に発表された諸作品は、「今日よりもむかしの風俗の中に置くほうが、はるかに秘密めいてゐて、言葉の本当の意味で快樂的なので」あり、子どもたちの間でサディズムとマゾヒズムが織り成す「少年」<sup>(19)</sup>（1911年）や、男性が女性に扮装して密かに夜の街を彷徨する「秘密」<sup>(20)</sup>（同上）女性の同性愛とそ

の破滅を描いた『卍(まんじ)』<sup>(21)</sup>(1928年)などに見られる性的倒錯の数々は、「かつては選ばれた者の快樂であり、そのやうな題材を扱ふことが一種の世紀末趣味を満足させ、知識階級の悪徳の表現たりえた」が、「今日の日本では、それらの題材の『新しさ』と別に、快樂も知的放蕩も悪徳の觀念性も喪はれ、あらゆる性的変質はあからさまな人間性の具現にすぎなくなり、その風趣は消え、そのロマンティズムは消失したのである」<sup>(22)</sup>という。

なるほど、20歳で迎えた敗戦を諸価値觀の最大の転機と見なし、戦後の社会ではあらゆる背徳や放縱が自明のものになったという事実を前提としながらも、敢えて戦前の「禁忌」に固執する道を選び、その侵犯を目指すことである種のロマンティズムを打ち立てようと目論んだ三島にとってすれば、谷崎が描き出した世界にさらなる「新しさ」を見出すのは困難であったかもしれない。

しかし、最初に述べた「純愛」ブームに見られるように、現代では、悪徳や頹廢からはほど遠い小市民的な安樂への逃避が一般的となりつつあるばかりか、觀念としての「純愛」に固執するあまりに精神を病む人さえいるのである。一方、安手の商業主義や情報の氾濫によって巷に溢れている性的倒錯の数々も、谷崎文学の世界に見られるやうな、あらゆる欲望を全的に肯定した上に美的感覺でもって妖しいまでに彩られた、健全なほどの開き直りにまで至っているとは言えない。

知能と感覺のすべてをただひたすら官能へと費やすことで谷崎が描き出した「甘美にして芳烈」「異端者の悲しみ」<sup>(23)</sup>、絢爛にして優雅な作品世界と、当局からの度重なる弾圧や世の善良を装った風潮に対し、戦前から戦中、戦後を通じてあくまで自己を貫いて見せるという尊大にして豪奢な反逆の精神は、今もってなお、谷崎をにおいて他に類を見ない。谷崎文学は現代においてこそユニークであり、新しいのである。

## 参考文献

- (1) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第二十四巻』 中央公論社 1970年 95頁
- (2) 片山恭一 『世界の中心で、愛を叫ぶ』 小学館 2002年
- (5) 大平健 『純愛時代』 岩波新書 2000年 219頁
- (6) 島崎藤村 『破戒』 岩波文庫 1957年
- (7) 田山花袋 『蒲団・一兵卒』 岩波文庫 1930年
- (8) 河野多恵子 『谷崎文学の愉しみ』 中央公論社 1993年 9頁
- (9) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十三巻』 中央公論社 1967年 360頁
- (10) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第一巻』 中央公論社 1966年 66頁
- (11) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十巻』 中央公論社 1967年 53頁
- (12) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十九巻』 中央公論社 1968年 1-174頁
- (13) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十三巻』 中央公論社 1967年 522頁
- (14) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十三巻』 中央公論社 1967年 553頁
- (15) 江藤淳 「三作を同時に推す」 『文藝』 1980年12月号 河出書房新社 268頁
- (16) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十五巻』 中央公論社 1968年 1-882頁
- (17) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第二十二巻』 中央公論社 1968年 362頁

- (18) 三島由紀夫 『決定版 三島由紀夫全集 33』 新潮社 2003年 485頁
- (19) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第一巻』 中央公論社 1966年 143-185頁
- (20) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第一巻』 中央公論社 1966年 247-270頁
- (21) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第十一巻』 中央公論社 1967年 393-569頁
- (22) 三島由紀夫 『決定版 三島由紀夫全集 36』 新潮社 2003年 95-96頁
- (23) 谷崎潤一郎 『谷崎潤一郎全集 第四巻』 中央公論社 1967年 452頁

### 参考URL

- (3) 興行通信社ホームページ <http://www.cinemanavi.co.jp/>
- (4) 日本放送協会（NHK）ホームページ <http://www.nhk.or.jp/>